あつめたるものどもをとらせて、わらはゝうせぬ、この子うれしと思ひて、もていきて、はゝにくはす、このゝちは山にいりて、みせしらせしいもところをほり、このみ、かづらのねをほりてやしなふ、

〔源氏物語三十七横笛〕御寺のかたはらちかきはやしにぬきいでたるたかうな、そのわたりの山にほれるところなどの、山里につけては、あはれなれば、奉れ給ふとて、御ふみこまやかなるはしに、春の野山霞もたど〳〵しけれど、こゝろざしふかくほり出させて侍るしるしばかりになん、

〔常磐嫗物語〕山のものにとりては、ところ、さわらび、くずの根、まつたけ、ひらたけ、略中月よだけまでもくはばやな、

〔有德院殿御實紀二十三〕享保十一年十二月廿四日、增上寺より佳茗草藥を獻じ、傳通院より蜜柑を獻じて、ともに歲杪を賀し奉る、

〔本草和名十草〕蕺尾　一名烏園一名三字烏國子、一名烏菌、已上出釋藥一名烏固、出雜要決和名古也須久佐、

〔倭名類聚抄二十草〕鳶尾　本草云、鳶尾一名烏園、和名古夜須久佐

〔箋注倭名類聚抄十草〕唐本注云、鳶尾葉似射干而濶短、不抽長莖、花紫碧色、根似高良薑、皮黃肉白、蜀本云、此草葉名鳶尾、根名鳶頭、亦謂之鳶根、又圖經云、葉似射干、布地生、黑根似高良薑、而節大、數个相連、

〔和爾雅七草木〕鳶尾一名烏園　紫羅傘同出于閩書

〔大和本草七花草〕紫羅傘　又鳶尾ト云、閩書云、本草圖經名鳶尾、葉似射干、花色紫碧、不抽高莖、俗呼紫羅傘、其根卽鳶頭、亦入藥、射干胡蝶花此類也、圖經又曰、人家亦種、葉似射干而濶短、與射干全別、射干花紅抽莖長、今案○貝原篤信陳藏器蘇恭所說射干ハ、倭名カラスアフギナリ、鳶尾ハイチハツナル事分明也、カラスアフギハ莖高ク花紅ナリ、イチハツハ莖短ク葉ヒロク、花紫ニ燕子花ニ似タリ、綱

鳶尾